

南海放送

活動名	愛媛出身「近代俳句の父」正岡子規伝記読み聞かせ
実施期間	令和 7 年 9 月 19 日
実施回数	会場 1 回

【事業実施の成果・課題】

卒業生に正岡子規がいることを日頃から学校生活で学んでいて、学校行事にも子規関連の取り組みがあるということで、子どもたちも身近に感じている人物の伝記とあって、熱心に耳を傾けてくれました。特に方言を多く用いたことも、子どもたちの関心をひいたようです。前年の実施でも好評だったため、朗読は1 ブロック 10 分程度とし、各ブロックの間には関連クイズを出題することで、楽しみながら内容を学んでももらえました。学校敷地内に子規と漱石が暮らした「愚陀仏庵」が再建されることは児童たちも意識しており、二人の友情を描く場面の朗読を取り入れたことで、再建後への興味を高めることに繋がられたと感じました。

【事業担当者およびアナウンサー（講師・読み手）の感想】

<佐伯りさアナウンサー>

45 分という授業時間の中で、番町小の前身となる学校へ通っていたころの子規の子ども時代や松山中学時代、上京後の漱石との交流、俳句を志す経緯、病との闘い、松山での漱石との暮らし、など盛りだくさんの内容をテンポよく朗読するよう、場面の抜粋を工夫しました。もともと子規については予備知識のある子どもたちでしたが、今回の朗読とクイズによって、より関心を深めてくれたのではないかと感じています。また授業後は、日ごろのアナウンス業務をはじめ放送全般についての質疑応答も盛り上がりしました。こうした活動を通して、今後も地域文化の掘り起こしや、放送活動への興味向上に関わっていきたいと考えています。

<小川貴弘アナウンサー>

番町小学校での読み聞かせを担当し、心から楽しい時間を過ごせました。今回、伊予弁のイントネーションに苦戦しましたが、先輩の発音を録音してリスニング練習して臨みました。子どもたちに「上手でした！」と褒めてもらえて本当に嬉しかったです。また、子どもたちの聞く姿勢にも感動しました。真剣な眼差しで聞き入り、クイズや感想発表の場面では、多くの子が手を挙げて堂々と自分の言葉で発言してくれました。その積極性に、私の方が元気をもらいました。私自身にとっても愛媛の歴史や偉人を改めて深く知る良い機会となりました。

＜山口皓太郎アナウンサー＞

子どもたちが一生懸命聞いてくれる姿を見て、こちら側がうれしくなりました。また、子どもたちが積極的に発言をしたり、正岡子規クイズに答えたりしていたので、地元ゆかりの偉人である正岡子規や夏目漱石への関心が高いのだなあと感心しました。私自身も、二人の偉人や伊予弁についても学びながら、楽しく取り組みました。伊予弁のセリフを完璧に再現したくて、たくさん練習しました。お世辞かもしれませんが、一人の子どもが「県外出身とは思えないくらい伊予弁が上手だった」と言ってくれました。初めて地元の方に認められたような気がして、とてもうれしかったです！これからも頑張ります！初めて地元の方に認められたような気がして、とてもうれしかったです！これからも頑張ります！

【教諭・保育士・子どもたち・視聴者などの感想】

＜先生方の感想＞

- ・子規さんの話を聞く中で、知識として知るだけでなく、好きなことを最後まで貫き通そうとする生きざまに心を動かされる児童が何人もいたことに喜びを感じました。番町小学校は今まで俳句作りにあまり力を入れていませんでしたが、愚陀仏庵の工事壁への俳句掲示を良い機会ととらえ、子規さんの後輩を育てていきたいなと感じました。ありがとうございました。
- ・プロの声で聞く正岡子規の話は、我々が授業で取り扱う学びと一味も二味も違うものとなったと感じました。子どもたちが聞き入っている様子が伺えました。改めて正岡子規の人物像が再構築され、認識が深まったように思います。その生き方から、自分たちの生き方に生かされるものを見つけてほしいと願います。
- ・正岡子規が大人になってからの功績についての内容については知っている児童が多くいたが、幼い頃のエピソードは初めて聞いた内容が多かったらしく、自分たちと同じ年代のころの話に親近感を抱いていた様子である。教室に戻って、国語の教科書を開き、音読をし始めた児童もいた。

＜子どもたちの感想＞

- ・子規さんの「負けない心」にも感動しました。どんなにつらくても、自分の好きなことを大事にして生きる事はとてもかっこいいと思います。私もうまくいかないことがあっても子規さんのように頑張りたいです。今日のお話を聞いて、正岡子規さんはただ俳句の先生というだけでなく、「生き方」を教えてくれる人だと思いました。私もこれから、自分の夢や好きなことを見つけて、一生懸命続けられる人になりたいです。
- ・改めて番町小学校は、松山市の中でも珍しい歴史のある学校なんだなと思いました。私が読み聞かせを聞いて印象に残ったことは、子規さんは詩人の他にも小説家や新聞記者だったことです。夏目漱石と正岡子規は、本音を言い合える仲だったと知って驚きました。アナウンサーの方々は、みんなにお話しする時と文章を読むときで全然声が違うんだなと思いました。
- ・セリフの読み方が工夫されていて、まるで明治時代にタイムスリップしたかのような没入感を味わうことができました。これからは読み聞かせをする機会があれば、アナウンサーの方々の読み方をまねしてみたいと思いました。普段は生で見ることにはできないアナウンサーの人達がいて、お話を聞いてよかったです。やっぱり、お話することのプロの人達の読み聞かせは、いつも聞いているお話とは違いました。それに、正岡子規さんの意外な所や、詳しい当時の性格などが知れてよかったです。また愚陀仏庵が学校に出来た時には、じっくり見たり入ったりして、番町小の伝統を受け継ぎたいです。

